

腹ペコのデカイ男を拾っ
たらマフィアのドンで、
世界一かわいい女の子だ
って溺愛されてます～身
を引いたら、巨根でずぶ
ずぶ♡俺の女だってわか
らされました～

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

序章 恋人でもないのに

台所のコンロは今日もフル稼働だった。

一つは煮込み料理、もう一つはスープ、残りの一つは炒め物。これだけ作ったところで、たった一人に、ものの五分で空にされることは確定だ。

ちょうど炒め物が終わり、火を一つ落とした時だった。

によきつと太くてたくましい手がお腹に回ってきた。そのまま、背中に大きな身体がのしつと乗ってくる。

「ん、相変わらず、いいにおいだな」

耳元に響く、低くて聴き心地がいい声。

それだけでぴくりと反応してしまう。それを隠したくて、わざ

と咎めるみたいな声を出した。

「重いです、ディーノさん」

「体重かけてないぞ？」

そう言って彼は肩に顎を乗せてきた。……近い、相変わらず。

「そういう問題じゃなくて、圧が重いんです」

「そう言うなよ、クララ見てると我慢できなくなるんだって。わかってるだろ？」

彼は平気でこういうことを言う。それが私をどんな気持ちにさせるか、わかってるのか、わかってないのか。

ふにっ♡

「ひゃうっ♡」

お腹に置かれていた手が、いつの間にか上に移動して胸をつつ

み込んでいた。そのまま、ふにふに♡と形を確かめるみたいに揉み込まれる。

「あ、あんっ♡　ちよっとお！　料理中は、やめてくださいよお！」

「こっちも美味そうだから……な？」

「な？　じゃなくてえ……♡　はう……♡」

ピンッ♡と先っぽを弾かれて、ますます変な声が出た。

「ちよっと触っただけなのに、もう乳首こんなピーンってなってるぞ？　かわいい」

「言わないでえ……♡　やだ、やだ♡　乳首いじめにやいでえ……♡　はふっ♡」

両方の乳首をきゅっ♡と摘まれた。そのまま二本の指でコリコ

リ♡と転がされて、立っていらなくなってしまう。

「ほら、腰抜けてんぞ？」

そう言われて、支えるみたいに大きな身体をぐっと押し付けられた。ゴリッ♡とおしりに感じる圧。その、あまりにも立派な存在感。

（おっきい……！ おっきすぎる……♡）

もし、こんなおっきいのを入れられちゃったら、どうなっちゃうんだろう……。そう思うだけで、お腹の奥から、とぷう♡と何かがこぼれてくる感覚がした。

「さてさて、メインディッシュだ」

言うなり、大きな手がお腹を撫でながら脚の間に忍び込んできた。

「あ、そこは、そこはだめっ♡」

必死で脚を閉じても無駄だった。狭い隙間を、すぐに太くて強い指でこじ開けられてしまう。

「なーに隠してんだよ。わかってるぞ、ここどうなってるか♡」

「ひ、ちよつと、んふう♡」

指がぬちい♡と割れ目をなぞった。服の上からなのに、そこから溢れる音に耳を塞ぎたくなる。

「ん？ やめてとか言つて、もうこーんなに濡らしてたのか」

ぬちいぬちいぬちい♡

指が、音を立てながら割れ目の真ん中を何度も往復する。その度にお腹がきゅんきゅんして、ますます蜜を垂れ流してしまう。

「あぁっ♡ やだっ♡ そこ、なでなで、やだぁ♡」

「ヤダじゃないだろうって、こんなヌレヌレでよく言う」

ズボンがすつと半端にずらされて、そのままパンツに手を突っ込まれてしまった。

割れ目に伸びた指がねつとり♡とたっぷり蜜をまぶし、ぬるゝっ♡と、上に戻ってくる。そこは……一番ダメなところだ。必死に抵抗しようとした。

「ディーノさん……っ！ クリ、クリはっ、ゆるしてえ♡」

「だめ」

即答された。すぐに太い指がぬるり♡と回って、クリの周りだけをなぞった。一番敏感な真ん中を避けて、ぐるぐると円を描くように。ぬりゅ……♡ぬりゅ……♡と溢れた蜜をからめながら根元から裏側まで何度も撫で回される。

「あっ♡　そこお……♡」

周りを撫でられるほど真ん中がじんじんしてきて、お腹の奥が引き締まる。触れてほしいのに、触れてくれないもどかしさに、腰が勝手に揺れてしまう。

「ひあっ♡　そこ、ばっかりい♡」

「ははっ、もう腰動いてんぞ？」

じんじんする真ん中を自分で追いかけてしまいそうになって、慌てて腰を引いた。逃げようと背中を仰け反らせても。

「なーに逃げてんだよ」

むぎゅつと背中に胸板が押し付けられて、腰をがっしり抱え込まれてしまった。もう身動きが取れない。指がまた、くるん♡と周りをなぞる。

ぬち……♡ぬち……♡ぬち……♡ぬちゅ……♡

指が円を描くたびに、割れ目から蜜が溢れて指を濡らしてしま
う。

「ひっ♡ あっ♡ クリのまわり、ぬるぬるってえ♡」

「撫でてるだけなのに、もうこんなにして」

耳元で笑いながら、わざと聞かせるみたいに、くちゅっ♡く
ちゅっ♡と周りをかき混ぜられた。

（お料理、まだ途中なのに……♡）

頭の片隅でそんなことがちらつくけど、お腹の奥が切なくて腰
を自分から揺らしてしまふ。それどころじゃない。

にちゅ♡にちゅ♡にちゅっ♡にちゅうっ♡

「ほら、聞こえるか？ このやらしー音♡」

「やだっ♡聞かせないでえ♡」

「なんで？ クララが気持ちよーくなってる音だろ？」

そう言っでわざとにちゅにちゅ♡と、音を立ててくる。そんな音を聞かされていると、耳まで熱くなってきた、胸の音がますます大きくなった。

「お願い、もうとめてえ……♡」

「だーめ。これからだろ？」

即答されて、くにゅ♡くにゅ♡と周りを指で撫でられた。ビクビクッと魚みたいに身体が跳ねるのを、片手で優しく押さえ込まれる。

周りを撫で回していた指が、するりと上に移動して、一番敏感な先端に届いた。

ちゅこっ♡ちゅこちゅこちゅこ♡

そのまま、皮越しに、上下に擦られ始める。

「ひっ♡ あっ♡ そこ、そこだめえ♡」

一番気持ちいいところを可愛がられて、一気に猛烈な快感が押し寄せる。

膝がぐくぐくと笑ってしまった。立ってられない。

「はあっ♡ だめ、だめえ♡ も、たってらんない♡」

「じゃあ支えてやる」

腕が腰をぐっと抱え直してくれる。でも指は止まらない。ちゅこちゅこ♡ちゅこちゅこ♡と皮越しに擦られ続けて、押しつける指の腹が、ぐにっ♡と重くなった。

「ひ、ん♡ それ、それえ、だめれしゅ♡」

「なんで？」

脚を閉じようと力を込めた。これ以上されたら、おかしくなってしまう。でも太ももがするりと割り込んできて、私の脚の間に彼の太い膝がねじ込まれて。

「あっ♡ 開かないでえ♡」

そのままぐいっと開かされてしまう。

「はい、残念」

耳元でくすくす笑われる。開かされたぶん、割れ目が無防備になっちゃった。そこへまた指が押し付けられる。

ちゅこっ♡ちゅこっ♡ちゅこっ♡ちゅこっ♡

擦られる音が、さっきよりずっと大きくなった。

「あっ♡ あっ♡ そんなにや、いじらないでえ♡」

「おっ、ますます濡れてきてるぞ？」

ちゅこちゅこちゅこっ♡ぐりゅうッ♡

鋭い気持ちよさが腰を走り抜ける。もう耐えられない。

「はひいい♡ イッちやううつ♡ イッちやうからああ♡」

「だったらいいだろ、イかせようとしてるんだから」

だんだんいたぶるみたいな動きに変わってきた。押しつぶしながら、何度もじゅこじゅこ♡といじめられ続ける。

「ヤバい♡ しよれ、ヤバい♡ お夕飯前、なのにい♡」

「関係ないって。夜は夜でイカせるからな？」

ぬちッ、ぬちぬちぬちっ♡

「そんにゃ、あ……!!♡ しよれ、らめっ♡ らめええ♡」

「誰にイカされるんだ？ ん？」

意地悪！　こんな時に、そんなことを聞くなんて！　そう思っても、快感で溶かされきった頭は、抵抗なんてできなかった。それどころか、素直に彼が望む言葉を吐き出してしまふ。

「ディーノさん、れすっ♡　ディーノさんに、クリいっぱい虐められて、イカされましゅううッ♡」

「……っ♡　死ぬほどかわいーこと言ってくれるなあ♡　ご褒美だ」

指の動きが一気に速くなる。敏感な先端を集中していじめ抜かれて、もうダメだった。

じゅこっ、じゅこじゅこじゅこじゅこじゅこ♡♡♡

「あ、イクッ♡　イクイクッ♡♡♡」

「いーけ♡」

じゅこじゅこじゅこじゅこじゅこっ♡じゅぐおっ♡♡♡

「ほおおお♡ いぐうう♡♡♡」

腰をみつともなくへこへこさせながら盛大にイッてしまった。
お腹の奥がきゅうっと締まって、下着の中が自分でもわかるくらい溢れる。恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

「かわい」

そのまま身体を反転されて、包み込むように抱きしめられる。
同じ石鹸を使っているはずなのに、ディーノさん特有の、香水みたいな匂いがした。あんなことをされたあとなのに、どこか安心してしまう。

彼の顔が近づいてきた。続いて降ってくる、甘くついばむみたいなキスの雨。くすぐったい。くすぐったくて、甘い。

「変ですよお、こんなの」

「そうか？」

まったく気にしていなさそうな顔。この人はいつもこうだ。

（だって私たち……恋人でもないのに）

言いかけた言葉は、結局口に出せずに飲み込んだ。

そう、私たちは恋人ではない。なのにこうして一緒に住んで、こんなことをしてしまってる。

すべての始まりは、彼と出会ったあの日だった。

一章 はら、へった

私には、お母さんがいない。

物心つく前に亡くなったので、記憶はほとんどない。父は年の大半を海の上で過ごす船乗りで、私は、三年前に亡くなるまで、おばあちゃんに育てられた。踏み台に乗らないと大鍋の中が見えなかった頃から、ずっと台所が私の居場所だった。

だからといって、寂しいとか不幸だとか思ったことはない。おばあちゃんは優しくかったし、父も港に帰るたびに不器用な愛情を注いでくれた。不満なんて、一つもなかった。

ただ、父にはある習慣があった。

お母さんの写真を、いつも持ち歩いているのだ。航海に出るときも持っていくし、帰ってくると、居間の椅子でときどき眺めている。豪快で、声が大きくて、何をやっても雑な父が、その写真を見るときだけ、とても優しい顔をする。

写真の中のお母さんは、淡いピンクのワンピースを着て笑っていた。女の子らしい、ひらひらした服だった。

「お母さん、かわいいね」

小さい頃、写真を覗き込んでそう言ったら、父は照れもせずに応えた。

「だろ？ 世界一かわいい女だった」

その言葉が、ずっと残っている。

私もいつか、誰かの世界一になれるのかな。かわいい服が着た

いとか、それだけじゃなくて、あの写真を見るときの父みたいな顔で、いつか誰かに見てもらいたかった。

誰かにとって特別な、女の子に。

けれど、かわいくなる方法を教えてくれる人は、うちにはいなかった。父に化粧や服のことが分かるはずもないし、おばあちゃんとは世代が違いすぎた。それでも小さいうちは、周りもまだ子供で、気にせずに済んでいた。

高校生になって、初めて、好きな人ができた。

同じクラスの、よく笑う男の子だった。廊下ですれ違うだけで、その日一日がうわの空になった。

かわいくなれば、私も選んでもらえるかもしれない。

生まれて初めて、本気でそう思った。雑誌を買い込んで読み込み、ネットで予習して、なけなしのお小遣いでスカートと靴を買った。洗面所の鏡の前で、見よう見まねで、アイブローで眉毛を描いて、赤い口紅を塗ってみた。

結果は、翌朝の教室で分かった。

「クララちゃん、どうしたの今日。……おばあちゃんの若い頃みたい」

笑いが起きた。悪気のない笑いだったと思う。私も一緒に笑うしかなくて、笑いながら、どこがどうズレているのかが最後まで分からなかった。彼も、輪の中で笑っていた。

その彼は、ひと月もしないうちに、クラスで一番垢抜けた女の子と付き合い始めた。すらりと背が高くて、巻いた髪もアイメイ

クもよく似合う子だった。

（私が、足りなかったんだ）

そう思った。だから、もっと頑張った。けれど、アイシャドウはうまくばかせずに目元が真っ黒に滲んで、パンダみたいになった。コテの使い方も分からなくて、おでこに作った赤い火傷の跡は一週間も消えなかった。友達に教えてもらっても、手先が不器用なのか、どうにも飲み込めない。そのうち友達もさじを投げた。頑張れば頑張るほど、笑われる回数が増えた。

そうしているうちに、諦めてしまった。

悪目立ちしないTシャツとジーンズ。薄くファンデーションを塗って、リップを引くだけの薄化粧。それが私の習慣として落ちていた。

そんな頃だったと思う。港に帰ってきた父が、居間の椅子で写真を眺めたあと、珍しく私を呼んだ。

「クララもこういう服、欲しいか？」

写真の、あの淡いピンクのワンピースのことだった。父なりに、何か気づいていたのかもしれない。

一瞬、迷った。欲しくないと言えば嘘になる。でも、着たところで、見せる人もいない。仮にいたとして、前みたいに笑われてしまったら立ち直れない。

「……ううん。いいよ、私には似合わないから」

父は少しだけ黙って、それから、そうか、と言った。それ以上は、何も言わなかった。

社会人になっても、それは変わらなかった。

職場の部署では、いつの間にか備品の補充やちよつとした掃除、誰かの頼まれごとを引き受ける係になっている。差し入れを持っていけば「助かるよ。クララさんって、お母さんみたいに気が利くね」と感謝される。いい人。気が利く。お母さんみたい。私を見る目は、いつもそこで止まる。

お母さんみたいになりたいと、確かに思った。けれどそれは、お母さんみたいと言われることではなかった。

料理くらいは女の子らしいアピールになるのかもしれないけれど、それを披露できるのは誰かと付き合ったあとの話だ。そもそも出会いがないと、女の子として見てもらえない。

街で見かける恋人たちや、友達の彼氏の話を聞きたびに思う。

かわいくて仕方がないって顔で彼女を見る、あの表情。父が、写真を見るときの顔。

いいなあ……。

そんな思いを抱きながらも、結局そんな人は現れず、時は過ぎていった。



その日の朝、いつものようにラジオをつけたまま朝食を作っていた。

港の物流の裏側を何十年も取り仕切ってきたという、マフィアの一家の話だった。トップが姿を消してひと月。死んだという噂

と、生きているという噂。幹部同士がぴりぴりしていて、港の倉庫がいくつか閉まって、警察が警戒を強めている。この街に住んでいれば、年に何度かは聞く種類のニュースだ。

（またあの人たちか）

それだけ思っ、私はパンを切った。自分には一生関わりのない世界の話だと、そのときは本気で思っていた。

その日は仕事仲間と、職場の近くの店へ飲みに行った。

隣の席に、営業の男の人が座った。よく話す、職場の中でも仲がいいほうの彼だ。仕事の愚痴や、最近見た映画の話なんかをして、普通に楽しく話せて、私は少しだけ嬉しい気持ちになった。

期待していなかった、と言えど嘘になる。こういう席の隣というだけで、ちょっとしただけ特別な気がしてしまうのが、私の悪い癖だった。

香水の匂いが先に来て、そのあとに彼女が来た。

同期の子だった。グラスを持って、私たちのテーブルにするりと入り込んでくる。彼女は私を見なかった。見る必要がなかったのかもしれない。

話しかけられた瞬間の、彼の目。

目の色が変わるというのを、私は初めて目の前で見た。

あ、やっぱり私はダメなんだ……。

グラスの汗を指でなぞりながら、ぼんやりと思った。ずっとこ
うなのかな。私は、誰の特別にもなれないのかな。

店を出ると、二人は同じ方向へ帰っていくのが見えた。

私は一人で、反対方向の坂道へ向かった。

登るたびに、港の灯りが少しずつ下に沈んでいく。夏の夜風は涼しかった。何とも言えない気持ちを抱えて、石畳の道をただ黙々と歩いた。



家の門灯の下に、見慣れない大きな影があった。

最初、誰かが荷物でも置き忘れたのかと思った。近づいてみても、それが何なのかよく分からない。

影が、動いた。男の人だ。ぐったりと座り込んでいる。

「だ、大丈夫ですか!？」

「は……」

「は？」

ただ事ではない気がして、かがんで耳を傾けた。

「はら、へった……」

タイミングよく、『ぐう』と音が鳴った。この人の、お腹から。

「へ？」

びっくりして、目の前の人の顔をまじまじと見る。

門灯に照らされた、日に焼けた顔は、げっそりしているのに、驚くほど整っていた。

返事をするのを、しばらく忘れた。

見上げてくる目は、少し濁っているけれど、どこかまっすぐ

だった。

「すまん、なんか、食わせてくれねえか？　礼はするから」

「あ、えーつと……」

どうしよう？　食べさせるにしても、どうやって？　家からなにか持ってくればいいのかもわからない。けれどそれにしては疲れているように見えるし、こんなところで食べさせるのも、気が引けた。迷いながらも、こう告げた。

「ここ、うちなんです。入ってください」

知らない男の人を家に上げるなんて、普通の女の子はしない。

そう思ったけれど、私は普通の女の子じゃない。それに、この人なら、大丈夫な気がしたのだ。なんとなくだけで。

「……いいのか？　こんな得体のしれない男、上がらせて」

「ふふ、そうやって聞いてくれる時点で大丈夫ですよ」

彼は一瞬黙って、呆けたようにこちらを見ている。顔に何かついているのかと思つて、つい頬に手をやった。すると、口の端を上げて笑つた。そんな顔も、すごく決まっていた。

「……そうかい、じゃあお言葉に甘えて」

彼がフラフラと立ち上がった瞬間、思わず後ずさりそうになつた。

大きい。彼が門をくぐるのに、わざわざ身を屈めるのを見て、改めてその大きさに驚かされた。



台所へ案内して、急いで冷蔵庫を開けた。

あるものを全部出して、大鍋に残っていた煮込みに火をつける。温め直す時間も惜しい顔をしていたので、まずは、かごいっぱいパンと、大きく切ったチーズを出した。卵をいくつか割って、ソーセージと一緒にフライパンへ落とす。

彼の一口は、私の三口分あった。

皿が空になる速さに、温めるほうが追いつかない。

「うつつま!!」

煮込みを口に運んだ瞬間、彼が目を見開いた。

「これ、なに入れてんの？」

「えっと……普通の野菜と、余ってたお肉とか……」

私が答えている間にも、彼は皿を自分のほうへ引き寄せて、次

のひと口を頬張った。

「人生イチウまい!!」

「お、大げさですよ」

「いや、それだけじゃない。マジでうまい!」

こんなふうに言われたことが、今までなかった。大げさだと思っただのに、頬が勝手に緩む。誰かに手放して褒められるのがこんなに嬉しいなんて、知らなかった。

彼が食べるのを見ているだけで、不思議と満たされた気持ちになった。

気づけば、冷蔵庫の中は明日の朝ごはんの分も残っていなかった。パンかごが空になったのは、この家に住んで初めてのことだ。うちのマグカップが、彼の手の中で、おままごとの道具みたいに

見えた。

「はあ、ごちそうさん……ごめんな、こんな食っちゃまって。ちゃんとあとで金払うから」

「いいですよ、そんな」

「いや、さすがにそれだけは払わせてくれ」

言いながら、彼は自分の指から指輪を抜いて、テーブルの上に置いた。金色の、黒い平たい石がついた指輪だった。彼の手についているときは控えめに見えたのに、私の前に置かれると、やけに大きくて重そうに見える。

「今、金持ってねえから。ひとまずこれで勘弁してくれ」

「えっ、こんなの受け取れませんか」

「飯代だから」

高そうだ、とは思った。でも、宝石のことなんて何も分からな
い。押し返しても押し返しても戻ってくるので、結局、私の手の
中に残った。

「いいのに……：：：：そういえば、なんでこんなところで腹ペコだっ
たんですか」

「あー……」

彼は頭をがしがしと掻き、一度だけ窓の外へ目をやった。

「すみません、聞くべきじゃなかったですね」

「いや、すまん。いろいろあつてな……」

彼は少し黙った。

私は落ち着かなくて、空になった皿を下げに立った。水の音だ
けが台所に響く。

振り返ると、彼は大きな身体を丸めるようにして、うちの小さな椅子に座っていた。何かを考えている顔だった。

「なあ。迷惑ついでにダメ元で聞きたいんだが……」

「はい」

「しばらくここに、住ませてくんねーか？」

私から目を逸らさないまま、声だけが少し小さくなった。

「は？」

ここに？　こんなカッコいい人を？　私の家に？

「ええええええ!？」

頭の中はパニックだった。洗剤のついたスポンジを持ったまま、私は固まってしまった。

「うん、そうだな……忘れてくれ」

彼は手を振って笑うと、あっさり椅子の背に身体を預けた。引き止める気もなさそうなところが、かえって気になった。

「あ、いや……なんで、ですか？」

「正直に言うと、ちよつと身を隠さなきゃならねえんだ」

机を指でトンと叩きながら、彼はさっきまでと変わらない調子で言った。

「あ……なんか、その……危ない系の？」

「ああ、そうだ」

間を置かずに返されても、目は逸れなかった。不思議と、それほど怖くはない。

「……正直、ですネ」

「隠したってしょうがないだろ？」

嘘をついて丸め込むこともできたはずなのに、聞かれたらあっさり本当のことを言う。だから、つい、こう聞いてしまっていた。

「いつまで、ですか？」

「いつまでって……あり、なのか？」

がた、と椅子を鳴らして身を乗り出した彼の目が、急に明るくなった。

「い、いや、もう少し確認しないと」

「まあ、そうだな……三か月ってどこか」

三か月。

長いのか短いのか、よく分からない。でも、気持ちはまだ前に傾いていた。

初めて料理をあんなふうに褒めてくれた人を、今夜、門の外に

出す気にはなれなかったし、それに、嘘をつかないこの人なら、なんとかなる気がしたのだ。

「いいですよ」

「本気か？」

彼は目を丸くして、テーブルに両手をついた。古い天板がぎしりと鳴る。

「自分で提案したくせに……」

「まあそうだが、まさか受けてくれるとはなあ。お兄さんちよつと心配になるぞ？」

眉を下げて笑う顔は、本気で私を心配しているように見えた。

「それです。そういう感じだから、大丈夫かなって」

「はっはっはっ、そうかそうか。正直者は得をするってわけだな」

太陽みたいに明るくて、大きな笑い声だった。

「じゃ、しばらく世話になる。ディーノだ」

「クララです」

差し出された手を握ると、私の手がすっぱり隠れた。

「クララ、か。うん」

私はまたシンクに向き直り、残った皿を洗い始めた。背中にずっと、視線を感じる。

水気を拭き取って振り返ると、彼はまだこっちを見ていた。こんな顔の人に見られる理由が、私には一つも思いつかなかった。

「……なんですか？」

「いや。……なんでもねえ」

客間へ案内しようとしたときだ。彼が立ち上がった瞬間、ドン、

と鈍い音が響いた。

ドア枠に頭をぶつける音で、うちが古い家だったことを思い出した。

二章 そのまんまが一番

最初の問題は、服だった。着の身着のまま転がり込んだ人だから、着替えが一枚もない。聞けば、しばらくは外出も控えたほうがいいらしい。

「じゃあ、私を買ってきますよ。服とか、いろいろ」

「……そんなことまで、いいのか？」

「だって、困りますよね？ 服もなかったら」

「まあそうだが……なんか悪いな、世話になりっぱなしだ」

「ふふ、今更ですよ。乗るかかった船ですし」

「この礼はするからな、必ず」

「期待してますよ」

「ああ、期待しろ」

冗談のつもりだったのに、返ってきた声は真剣だった。

そして、サイズを聞いて耳を疑った。5Lだという。

休日の朝から出かけて、大きめサイズの専門店でなんとか見つけた。棚から広げてみて、おばけみたいな大きさに改めて驚く。本当にこれを、人が着るんだろうか。

なんでもいいと言われたので、着やすそうなTシャツとジーンズを何着か買ってみた。というか、それ以外のものは私にはとても無理だ。センスがないことを、人生をかけて証明済みなんだから。

帰って渡すと、彼はその場で試着した。あんなに大きく見えた服が、ぴったり——なんなら、肩のあたりが少しきつそうにすら

見える。そして、ただのＴシャツとジーンズなのに、異様に決まって見えるのもずるい。

「どした？」

「あ、いえ。おっきいなあって」

「んー、まあな。クララもちっちゃいから、余計かもな」

屈んで、目を合わせられた。

「子供みたいですね、私……」

「いや？　そうは見えない」

する、と頬を撫でられた。それだけで背筋にぴりつとした感覚が走って、固まってしまう。

「え……？　なん、ですか？」

「なんでもない」

ニカツと笑つて、離れていった。
動作がいちいち心臓に悪い人だ。

（三か月も……大丈夫かな、私）



翌朝、目が覚めて、寝起きのまま台所へ行くと、彼はもう起きていて、窓際の椅子に座っていた。そんな姿すら絵になつてゐる。

「おはよ。頭、爆発してんな。……かわいい」

寝癖のついた私の頭に大きな手が乗って、くしゃりと撫でられる。冗談だ。そうに決まつてゐる。

「お、おはよう、ございます……」

朝日に照らされた彼は、どこまでも爽やかだった。寝起きの顔で、なんでそんなに爽やかなんだろう。こんな人が本当に私の家にいるという事実には、改めてぽーっとしてしまう。

そこで、やっと気づいた。

（あっ……！ すっぴんだった……！）

いつもの薄化粧すら、今はない。昨日は出かける用事があったから、先に化粧をしていたのに、今日はそれがなかった。

目の前の美しすぎる男を前に、急に恥ずかしくなって、両手で顔を覆った。

「ん？ 何してんだ？」

「あ、すっぴん……だから……」

「なーんだ、そんなことか。なんにもしなくても、かわいい

ぞ？」

椅子から立った彼が、顔を覆った私の手ごと覗き込んでくる。

指の隙間から見えた顔が、近い。

「は？　かわいい？　私が」

「クララ以外、誰がいる？」

首をかしげる顔は、本気で不思議そうだった。ようやく顔から手を下ろすと、耳が熱くなった。

「だ、だって、私、そんなこと言われたことなくって……」

うつむいて、意味もなく指でパジャマの裾を弄ってしまう。

すると、甘い声の上から降ってきた。

「……だったら、教えてやる」

大きな身体が、私の前で低くなった。跪いたのに、目の高さが

ほとんど変わらない。

続いて、大きな手で両方のほっぺを包まれる。

「このぷくつとしたプニプニのほっぺ、かわいい」

「——っ！」

「キョロキョロしてて、表情もコロコロ変わって、ずーっと見てたくなる目も、かわいい」

ちゅ、とまぶたにキスを落とされる。

「ん……っ♡」

「それから、このよく動いて、よく笑う口も、かわいい」

親指でスリ……♡と撫でられて、じん♡とした感覚が背中を伝った。

「あ……♡」

「とにかくゼーんぶ、かわいい」

両頬を包まれたまま、額までこつんと合わされる。息の仕方を、忘れた。

「や、やめてくださいよお！」

「なんで？」

「調子に、乗っちゃうから……」

彼が一瞬、黙った。笑ったままなのに、目だけが急に真面目になる。

「乗りゃーいいだろ、素直に」

「そういう生き方じゃ、なかったから……」

口にした声は、自分でも驚くほど小さかった。彼は何も言わず、親指で私の頬をひと撫でした。

「ふーん。——ま、いいけどな。わかるまで、言ってやるよ」
軽い声なのに、少しも引く気がないのが分かる。立ち上がった
彼の手が、また私の頭に乗った。

「……っ！」

なぜか、腰が抜けそうになった。それを察したみたいに、太い
腕で支えられる。この人の言葉は、まっすぐ私の傷の一番深いと
ころに届いてしまう。



それから、心臓が酷使される日々が始まった。

夕飯のあと、マグカップを渡そうとすると、私の手を、大きな

掌がふわりと包み込んだ。

「手、ちっせえな……。ほら、俺の指、一本でお前の三本分あるぞ」

私の指を一本ずつ数えるように触れてくる。ディーノさんのごつごつした硬い指先と比べると、自分の手がひどく頼りなく、そして確かに女の子の身体なのだと思い知らされる。

理由もなく、ぎゅう、と抱きしめられることも増えた。

「んつとに、かわいいーなあ、クララは」

「え？ え？」

大きな体につつま込まれて、ディーノさんの匂いがして……。頭がうまく回らない。

何が起きてるの？ 私の身に、何が？

「おーい、起きてるか？」

「……？ ……？ ……？」

「……かわい」

固まっていると、また抱きこまれる。

距離が、近い。心臓に悪すぎる。

朝だけで「かわい」と言われた回数が両手の指では足りなくなつて、私は数えるのをやめた。何より顔が良すぎるので、息をするように吐き出される普通の一言でも、破壊力が桁違いなのだ。

狭い廊下ですれ違ふとき、私のほうが壁に張り付くしかない。

彼が通るのを待っていると、ふと足が止まって、頭の上から声が

降ってきた。

「毎日顔合わせてんのに、なにそんな固まってるんだよ。ほらほら」
「あ、ちか、ちかい！」

息がかかる距離だ。

からかわれているんだと、思った。冗談で、わざと距離を詰めて私の反応を楽しんでいるのだと。でも、近づいてくる顔は、笑っていないかった。

顔がもっと近づいてきて、ちゅ、と何かが唇に触れた。一瞬遅れて頭が理解する。

「な、ななな!？」

唇を離れたあとの目の色が、少しだけ暗く沈んでいた。

「な、んで!? 私と!？」

「かわいかったから」

触られた場所がまた熱い。

「う、うそ！」

「嘘なんかつくかよ、かわいいーぞ？ クララは……食っちゃいたくなるほどな」

耳元に落ちた息の熱さに、身体がびくつと跳ねた。

「ひゃっ……♡」

変な感覚がした。私、おかしいのだろうか。唇に触れただけの感触が、いつまでも熱を持って消えない。

黙って私を見下ろしている彼の顔は、どこか迷っているように見えた。

「……」

「どしたんですか？」

「いや、襲おうか迷ってた」

とんでもない発言に頭がショートしそうになる。思わず後ずさると、すぐに背中が壁に当たった。

「こ、こわい、こわいですって！」

「だよなあ……また今度にするか。さすがにな」

次の瞬間には、いつもの笑顔に戻って頭をくしやりと撫でられた。なのに、膝から力が抜けそうになる。

「……いや、今度って!？」

「もう少し慣れたらってこと」

「慣れる」の意味は、考えたくない。

「ど、どうやって……？」

「まあ、そのうちわかる」

彼は笑いながら廊下の奥へ行ってしまった。壁に寄りかかったまま動けずにいると、少し先でドン、と聞き慣れた音がした。

その夜、私は自分の唇を何度も触って、朝まで眠れなかった。



それから数日、彼は事あるごとに私をからかった。

後ろから急に抱き上げてきたり、頭に顎を乗せてきたり。抵抗しても「かわいいから」で押し切られる。

あの指輪は、何度返そうとしても受け取ってもらえなかった。

私の指にはどれも大きすぎるので、家にあった細いチェーンに通

して、首から下げている。なくしたら怖いから、というのが最初の理由だった。今は、服の下で肌に当たっている金属の感触があると、少し落ち着く。

それを、職場で見られた。昼休みに襟元から覗いたのを、同期の子が見つけたのだ。

「それ、本物？」

「え？」

「ちょっと見せて……これ、どうしたの？」

同期の子はチェーンを持ち上げ、黒い石を照明にかざした。その声が、それまでより少し低くなった。

「ご、ご飯代だって……」

「ご飯代!？」

彼女が口にした金額は、想像をはるかに超えていた。

帰ってすぐ、チェーンごと彼の前に差し出した。

「こんな高いもの、受け取れません！」

「ん？ たいしたことないだろ」

彼はソファから動かず、新聞越しに片目だけこちらへ向けた。
差し出した私の手は、宙に浮いたままだった。

「あります！ たいしたこと。私のお給料何か月分だと思ってる
んですか！」

「このくらい、今度いくらでも買ってやるって」

冗談を言っている声ではなかった。本気で不思議そうな顔に、
伸ばしていた手が止まる。

「う、受け取れませんよお！」

「俺はクララをめいっぱい甘やかしたいんだよ。だから、なんでも受け取っとけ」

感覚が違いすぎる……。デイナーさん、いったい何者？
返すに返せなくて、指輪は、結局また私の首に戻った。



その夜だった。

テレビを消したら、デイナーさんが狙っていたかのように腰に腕を回してくる。

「ほら、こい。クララ」

「ひゃっ！」

そのままソファに座る彼の膝の上に、ひよいと乗せられてしまった。

「ちょ、猫かなんかと思ってませんか？」

「いや？ 女として見てる」

「なっ……!？」

「んー、かわいい」

ほっぺに、ちゅつとされる。

「ひゃう♡ やめてくださいよお！」

「なんでだ？ こんなかわいいのに」

「うそです……っ！」

「俺は嘘なんかつかない」

続けて今度は、首筋に、ちゅ、ちゅっ♡

「ひんっ♡ そこは、だめえ……♡」

「はあ、クララ、そんな声出して……誘ってんのか？ さすがに我慢できないぞ？」

「そ、それは！ ディーノさんがあ……！ ひゃあ♡」

鎖骨にキスが落ちてきて、そのまま更に下へ。

「クララ……」

彼はもう、ふざけていなかった。真剣で、どこか苦しそうで。

「触っていいか？」

「へ？ さ、触るって？」

「クララの、ここ」

っん、と胸のあたりを指さされた。

「な、なんで？」

「触りたいから」

（ディーノさん、潜伏生活でストレス溜まってるのかな？ それで、人肌が恋しいとか？）

そう思ったら、少しだけ落ち着いた。そうだ、きっと処理なんだ。だったら、協力、するだけ。でも――。

「私で、いいんですか？」

「クララがいい」

胸がじいん、とした。たとえこの場だけだとしても、ディーノさんが、そう言ってくれるなら。

「……いいですよ」

「ホントか？ やった」

その瞬間だけは少し幼く見えて、ほっとした。

服の上から、胸にそっと触れられた。最初は、触れるか触れないかくらい、そっと。

「ん……♡」

「かわいいー声」

耳元で言われながら、またするりと輪郭をなぞられる。

「ふぁ……♡」

「もっと聞きたい」

むにむに♡と揉み込まれて、胸が熱くなってくる。

「んぁっ♡ や、言わないでえ……♡」

「なんでだよ？ ほんとのことだぞ？」

「そういうとこです……！ ひ、あ……♡」

両膝で挟み込まれて、両手が胸にかかった。

「クララ……力、抜いてろ」

低い声が耳元を掠める。

シャツの裾から入ってきた大きな手が、直接肌に触れた。少し高い彼の体温が、お腹から胸へと這い上がってくる。シャツの中で動く手の形が、布の上からでも分かった。

「あっ、だめ、そんな……」

「だめじゃないよな？　かわいい声、出てんじゃない」

胸の先端を、太い指先が迷わず捉える。少し硬くなったそこを、指の腹でくにくに♡と転がすように弄られた。

「ひっ、ああっ……！」

「めちやくちや感じてんな……。初めてか？」

「そ、そうですね……っ、だから、も、むりい……っ♡」

「……そうかあ、俺がはじめてかあ……！　さいっこうだな♡
じゃあ、たっぷり気持ちよくしてやらないと」

彼が、何故か浮かれたみたいな声を出しているけれど、こっちは
はそれどころじゃない。

「あ、そんなあ……♡　これいじょ……おぉ♡」

指先の動きが速くなる。ぴんっ♡と弾いた。それから、きゅっ♡と摘まれて、先端だけがコリコリ♡と責め立てられる。

「ああっ……！　や、だめ、おかしくっ……♡」

「おかしくなれっ。ほら」

両方の胸を同時に掌で包み込まれ、親指でぐりぐり♡と押し潰されるように刺激される。

頭の中が真っ白になって、天井の木目が滲んで見えなくなった。

「ほら、おっぱいだけでイけ」

耳元に落とされた声と同時に、指先がさらに強く、ぴんツ♡と先端を弾いた。

「いやっ、あ、ああっ……!!♡♡」

目の前がチカチカと光って、身体の奥から痺れがせり上がってきた。

彼の腕にすがりつく。足の先まで力が抜けて、ガクガクと震えが止まらない。

その頃にはもう、すっかりぐずぐずになって、大きな胸板にもたれるしかない。

「ホントにおっぱいだけでイツたのか？　かわいいーな、ホント」

後ろから顎を掴まれて、唇をくっつけられた。そのまま、ねろ♡と舌を絡めるキス。

「ふう、ん……♡」

（あんなことされたあとに、こんなキス……溶けちゃう……♡）
するり、と大きな手が前に伸びた。

「中も、みていいか？」

シャツのボタンに手をかけて、甘えるみたいに聞いてくる。

「は、はい……」

緊張しながら、そう答えるしかなかった。

「じゃ、遠慮なく」

意外に、と言ったら失礼かもしれないけれど、プレゼントの包を開くみたいに、丁寧に開かれていく。

とうとう全部のボタンが外されて、中のキャミソールが見えて——彼の手が、その裾にかかった。

そのとき、大変なことに気づいた。

「あっ……！」

「ん？ どした？」

（スポブラ……！と、綿パンツ……!!）

「？」

怪訝そうな顔をされても、言えるわけがない。やってしまった。こんなことになるなんて、思ってもいなかったから。

「あ……ごめんなさいっ！ やっぱりナシで……！」

「ちよ、今更なに言っただ。却下だ、却下。なんでだよ？」

「だってえ……下着があ……とても見せられるものじゃないんで

すう……！！」

「下着い？　なんだ、んなこと気にしてんのか？」

「そんなこと、じゃないですよ……恥ずかしい……」

普通の子は、もったかいいのを着ているはずだ。一度だけ背伸びしてデザインのある下着をつけたら、ワイヤーは痛いし、ショーツは食い込んで落ち着かなくて。結局スポブラと、お腹まですで隠れる綿のパンツに戻したのだ。どうせ見せる人もいないと思っていたのに、こんなことになるなんて……。

「……すみません、色気なくて」

「いや、めっちゃくちゃかわいいって」

キャミソールをめくり上げられて、スポブラが灯りの下に晒された。飾りも何もない、ただの白い布。慌てて隠そうとした両手

を、やんわりと退けられる。

「ほら、こういうのな」

スポブラの上から、むにゅ♡と胸を掴まれた。さっきまで弄られていた先端が、布の下でまだ尖ったままなのが、自分でも分かる。そこを布越しに、くにくに♡と押し込まれた。

「ひあっ♡ な、なんで、また……♡」

「ブラ越しでも、こうやっていじめられるからいいな。ここ、布の上からでもわかるくらい立ってんぞ？」

「い、言わないでください……♡」

色気のない下着なのに。むしろ面白がるみたいにな、彼は布の上から先端だけを、くり♡くり♡と転がし続ける。

「こっちは、どうなってる？」

大きな手がするりと下りて、パジャマのズボンの中に入ってきた。

くにい♡

パンツ越しに、いつの間にかしつとりしていた場所を撫でられる。それだけでビリビリとした刺激が駆け上がってきて、のけぞってしまった。

「ひ、うう……♡」

「……お？」

指が、止まった。

「クララ。パンツ、濡れてんぞ、ぐっしよりと♡」

「——っ！」

「染みちゃって色変わってるなあ……エロ……♡」

耳元に、熱い息がかかる。ディーノさんも、興奮してるの？
こんな格好の私に？

「見ろって、ほら」

パジャマのズボンを膝まで下ろされて、脚を、彼の膝で左右に開かされた。

「や、やだ、見ないで……！」

「見ろ。自分で」

逆らえない声だった。おそろおそろ視線を落とすと、白い綿のパンツの、真ん中だけが色を変えていた。濡れて透けて、中の形がうつすらと見えている。

「これさあ……やばいって」

彼が、低く唸った。

「はあ……悪いことしてるみたいで、滾る……っ♡ 癖になりそうだ♡」

「な、なんでえ……？」

「だってそうだろ。こんな真面目なパンツ穿いといて、中身、こんなにエロいんだから」

透けたところを、指の腹でぬるり♡となぞられる。

「ふ、う……♡ そこ……っ♡」

「それとも……エッロい下着買ってきて、着せてやろうか？ん？」

くにくに♡と敏感な粒の上を押しつぶされながらそんなことを言われて、おかしくなりそうだ。

「や、やあ……♡ 遠慮しますう……♡」

「そうか？ 着ても着なくても、おんなじだけだな……♡ こうやって、くちゅくちゅ♡って、可愛がつてやるだけだ」

「は、ふ……っ♡ そ、そこはあ……♡」

とうとう、手がパンツの中にもぐりこんだ。あの子供みたいなパンツの中で、ディーノさんのおっきな手がごそごそと動いて、指の先が、ぬちぬち♡と音を立てながら中をかき回している。その光景を、開かされた脚の間で、見せられている。卒倒しそうだった。

言葉どおり、くちゅくちゅ♡と音を立てて、すくった蜜を、ぬる♡とさっきの粒に塗りつけられる。滑りのよくなったそこを直接触られる感覚が、さっきまでとはまた違うゾクゾクを連れてくる。

（知らない……！　こんな感覚、初めてで、わかんないよお……！　なのに、撫でられるたび、お腹きゅんきゅんするし、ビリビリして……もつとしてって、思っちゃってる……！）

「これ、なんていうか知ってるか？」

さっきから彼は、膨らんだ粒ばかりを集中してくりゆくりゅ♡っとしつこく可愛がっている。されればされるほど、何かがせり上がってくる感じがして、怖い。怖いのに、どこか期待している。

「わか、にやいれすう……♡」

「クリっていうんだぞ。よく覚えとけ。これから死ぬほど可愛がって、気持ちよくしてやるからな……♡」

「ひ、や、やらあ……そこ、そんな、いじめられたら、へんに

なっちゃうからあ♡」

「変にしてんだよ。ここ、こうやってじゅこじゅこ♡っていじめられたら、イクイク♡ってできるからな。さっきの乳首のときより気持ちよくて、癖になるぞ？」

「こわい、そんなの、こわいですう……♡」

「怖くない。俺が全部教えてやるから、な？ 俺を信じろ」

「う……」

頼もしい感じが、してしまった。こんなことを、されてるのに。

「ん？ ほら、気持ちいいだろ？」

ちゅこちゅこちゅこっ♡

上下に擦るように可愛がられて、急速に上がってくる感覚。これが、気持ちよさなの？

「あ、あ、それ、それえ……♡」

「きもちー、だろ？ ほら言えって。言え」

ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅく♡

少し押しつぶしながら、何度もしつこく擦られてしまう。

「あ、ああ、ああ——♡ らめ♡ それらめ♡」

「ほら、なんて言えばいい？」

「ぎもち、ぎもち、れしゅ♡ だから、も、いじめないれ♡」

「ん、ちゃんと言えてえらいぞ。ご褒美に、クリでイかせてやる」

「へっ？ ほ、おとお♡」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこ♡

もう、一番弱い場所は、見抜かれていた。そこばかりをきゅむ♡と潰しながら高速でしごかれて、もうだめだった。

「あ、くる、くるくるッ♡」

「——イクって言え」

今までの陽気な声と打って変わった、低い声。従うしかない、感じがした。

「イクッ、いくううう♡」

無我夢中でそう叫んだ。ビクビクッと跳ねる腰を彼が押さえ込みながら、クリに置かれた指は、ぎゅーっとそこを押さえつけて、小刻みに振動させている。

「はふ……、はふ……♡」

するつと、パンツの中から手が抜け出して、そのままパンツ越しに、お腹を撫でてくれた。

「ほらな？ 十分エロいだろ？」

「~~~~ッ!!! もうっ!」

「——これから、もっとエロくしてやるから、覚悟しとけよ」

「ひ……っ♡」

抗議したかったけれど、耳元に落ちた熱い息に身体がまたぞくりと震えて、結局、何も言えなかった。

予告編

体験版の本編は、ここまでです。

ここから先は、完全版の中から。
どれも、続きは本編でどうぞ。

三章 慣らしてやる より

「こうやって、しっかり慣れとかねーとなあ……♡」

「な、慣れる……?」

「ほら、これ」

びたん♡

バキバキに勃起した、ぶっといおちんちんが、おしりの上に置かれた。

それだけで感じる、圧倒的な存在感。脈打っているのさえ、感じられる。

「これがな……」

彼はそれを手に持って、前に回して、私のお腹にびたりと添わ

せた。

「……ここまで、入っちゃうぞ？」

ズリズリ♡とお腹に擦りつけられたそれが、おへそをコンコン♡とノックする。

「ひっ……♡」

「クララのちーっちゃん子宮も、ぺっちゃんこになっちゃんかもなあ♡」

「や、やだあ……♡ ゆるしてえ……♡」

「だいじょーぶ、奥死ぬほど突かれて、イキまくって、気持ちよくなるだけだ」

「ひいん♡ それが、こわいんですう……！」

「まあ、今日はまだ入れない」

そう言って、彼はあっさり離れた。お腹に触れていたものは、まだ熱くて硬いままだったのに。

ひっくり返されて、正面から、ぎゅむ、と抱きしめられた。硬い筋肉に包まれる感覚と、雄っぽい匂いに、クラクラする。

「ん……♡」

「しっかり慣れたら、いれるから。準備しとけよ？」

四章 一緒に來い より

「なあ、クララ。俺と、一緒に來てくれないか」

「え？ 私が、ディーノさんと？」

私を見下ろしながら、いつになく真剣な目で。

「そう、クララと」

テレビの音が、急に遠くなった。

「なんで？ なんで私を一緒に？」

「好きだから」

驚いた。そんな言葉、言ってくれる人は今まで一人もいなかったから。だから、すぐに信じられなかった。

「こんな、私を？」

「こんなじゃない」

彼がそう言ってくれるってわかっていたのかもしれない。それでも、つい言ってしまった。……甘えたかったのかもしれない。

「化粧もできないし」

「クララの素顔が好きだ」

親指が、ほっぺに触れた。

「……センスもないし」

「関係ない……むしろ興奮する♡」

綿パンツの日のことを思い出して、顔が熱くなった。

「……料理以外の取り柄、ないのに」

「クララの作る飯が死ぬほど好きだ。でも、それが理由じゃない」

「……じゃあ、どこが？」

「全部」

言葉が、なくなった。

何を言っても、迷いなく返ってくる。私が積んできた「だめな理由」を、この人は一つずつ、何でもないことのように扱う。

「……正直なところ、俺もこんなに好きになるとは思わなかった。でも、なっちまった。そうになったからには手に入れる。俺はそういう男だ」

有無を言わせない声だった。笑ってはいるのに、逃げ道はきれいに塞がれている。

「勝手ですよ」

「知らなかったか？　じゃあ、知ってもらうしかない」

さっと膝裏に腕を入れられて、抱き上げられる。そのまま寝室

に連れていかれた。

【中略】

「一晩時間やるから、準備しとけ」

「準備？」

耳元に顔を寄せられて、唇が当たる。

「俺のになる準備」

低い声が、直接響いた。……じゅん♡と、蜜がこぼれるのがわかる。

「あ……♡」

「かわい」

続いて降ってくる、甘い口づけ。

「明日は、入れるから」

五章 誰の女だ より

「おかえり、クララ。待ってたぞ！」

玄関のドアを閉めた瞬間、ぎゅむ、と抱きしめられた。そのま
ま、すぐに唇が近づいてくる。

「ま、待ってください」

慌てて、手を間に挟んで止めた。彼の唇が、私の手のひらに当
たった。

「？」

口を塞がれたまま、彼が怪訝そうに眉をひそめる。

「……」

言葉が出てこない。泣きそうだ。でも、言わなきゃ。今言わな

かったら、私はこのまま抱かれて、明日には何も言えなくなる。

「あの、……ついていくの、……お断りします。……お別れ、したいです」

パツと、手が外された。

「……は？ 別れ？」

低い声だった。

たまらず、うつむいた。本当のことは言いたくなかった。愛人の一人になるのが怖い、なんて言ったら惨めだと思って。

「や、やっぱり、合わないと思って」

彼の眉がわずかに動いた。それでも、腰に回った手は離れない。

「合わない？ どこがだ？ ……俺に気になることがあるなら、

直すぞ？ 言ってみろ」

まだ優しい声で、彼は私の顔を覗き込んだ。

なんで、そんな優しいことを言うんだろう。絆されそうになる気持ちを抑えながら考えた。ディーノさんに直すところなんか、あるはずがない。直さなきゃいけないのは、いつだって私のほうだ。

だから咄嗟に、こんな嘘を言ってしまった。

「他に、好きな人ができたので……」

「……何？」

すうっと、空気が冷えた気がした。

「他に好きな奴、だと？ 誰だ？ 言えよ」

「い、言えません」

笑っていなかった。あの夜、ソファで笑いが消えたときと同じ

で、もつとずつと、深い。

「ほーう、かばおうってか。そういうつもりなら、こっちもやり方を考えないとな」

いきなり、抱き上げられた。

「きゃ、ちよつと……」

連れていかれたのは、ベッドの上だった。ぼすん、と落とされて、すぐに覆いかぶさってくる身体。天井が、彼の肩で見えなくなる。

「や……！」

「これからクララにわからせる」

彼が着ていたTシャツを脱ぎ捨てて、逞しい身体があらわになった。

「な、なにを」

「お前は俺の女だって」

体験版は、ここまでです。

よく食べて、よく笑うこの大型犬は、こう見えて、我慢もします。——でも、言いつけを破った日の彼は、雰囲気が変わって——!?

「そんなかわいい顔するなよ、我慢できなくなるぞ？」

「言いつけを破って、俺以外の男と話したな」

「じゃあ、まんこにもきっちり教える、今から」

怖い顔を見せられても、最後は世界一大切にされる、いちゃラブハッピーエンドです！

完全版は本編（序章～七章＋彼視点の『彼の話』）に、番外編『私の旦那様』を収録して、約5.9万字。
ここまで読んでいただいたのは、その冒頭部分です。

▼ この続きは、完全版で

DLsiteにて発売中です。サークル「なぎさの妄想部屋」、または作品番号RJ01705147で検索できます。

https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/RJ01705147.html

気になったら、お気に入り登録だけでもどうぞ。